

第 3 章

独立後のカザフスタン政治に関する先行研究概観

岡 奈津子

要約：本稿はソ連解体後のカザフスタン政治に関する先行研究を概観する。カザフスタン政治研究においては民族問題、なかでも独立後の「カザフ化」とロシア人問題が中心的テーマであったが、ナザルバエフ政権の長期化と旧ソ連諸国における「カラー革命」の勃発を背景に、近年、権威主義体制に関する研究が活発化している。

キーワード：カザフスタン 民族問題 権威主義体制

はじめに

本稿はソ連解体後のカザフスタン政治に関する先行研究を概観する。ここでは、カザフスタン政治研究においては民族問題が中心的テーマであったが、近年、権威主義体制に関する研究が活発化していることを示す。その前に、本稿では扱わないテーマおよび文献について一言述べておきたい。外交・安全保障は国内政治と密接な関係があり、近現代史は独立後の政治を理解する上で重要な鍵となるが、ここでは割愛する。また本稿は日本語および英語の文献のみを対象としているが¹、ロシア語文献（カザフスタンおよびロシアの研究者によるものが中心である）の研究動向は、稿を改めることとしたい。

なお最近、ラウトレッジ社から近現代の中央アジア政治に関する既発表論文を収録したシリーズが刊行され（Dave 2010a, 2010b, 2010c, 2010d）、本稿が引用する論文のいくつかもそちらに所収されている。

第1節 民族問題

ポスト・ソビエト地域の民族問題として最も注目されたものの一つに、いわゆるロシア人問題がある。ソ連解体によってロシア以外の国々に「取り残された」ロシア人は2500万人ともいわれ、彼らが居住国の国民としてうまく統合されるのか、それとも自分たちが多数派を占める（多くの場合ロシアと隣接する）領域の自治ないしは分離独立を要求するのか、また彼らの存在を理由にロシアが他の旧ソ連諸国の内政に干渉し、それが深刻な対立や武力紛争にエスカレートするリスクはないか、などがさかんに議論された。ソ連崩壊時、ロシア以外の旧ソ連諸国のうち、カザフスタンはウクライナに次ぐ規模の、また国内総人口に占める割合がもっとも高いロシア人住民を抱えていたため、在外ロシア人を扱った研究ではほぼ必ず事例としてとりあげられている²。またカザフスタン政治に関する研究においても、民族問題は主にカザフ人とロシア人（あるいはスラブ系民族を中心とする言語・文化的にロシア化した人々）とのあいだの利害衝突としてとらえられてきた（Laruelle and Peyrouse 2007）。

ロシア人が民族的な権利を要求して立ち上がる可能性がさかんに論じられた背景には、ロシア以外の旧ソ連諸国における「民族化」がある。これらの国々では、制度上は共和国という形の民族領域を与えられながら、それに対する実質的権力をもたなかった民族エリートが、独立後、自分たちの政治・経済・言語・文化的地位を向上させるための諸政策を実行したが（Brubaker 1996）、このことはロシア人など非基幹民族が周縁的な存在に追いやられることを意味した。カザフスタンにおいても、カザフ人知識人の要求（カザフ語の国家語化、民族文化の復興、歴史の見直し、在外カザフ人の呼び寄せ等）が政策に取り入れられるとともに、公職に占めるカザフ人の割合が上昇し、基幹民族による権力の独占が進行した。この「カザフ化」の実態やそれが民族間関係に与えた影響は Bremmer（1994）、Bohr（1998）、Kolstø（1998）、Masanov et. al.（2002）、Laruelle and Peyrouse（2007）らによって分析されている。

しかしカザフスタンのロシア人運動は1990年なかばをピークにその後は低迷し、大量出国によってロシア人の存在そのものが縮小したこともあって³、国内政治におけるロシア人問題の重要性は低下した。民族的不満を理由とするロシア人の動員はなぜ尻すぼみになったのか。この問いに対する説明としては、1995年を起点とする権威主義体制の強化との関係が指摘されている⁴。Dave（2007）および岡（2006）は、ナザルバエフ政権が民族運動そのものを抑圧する一方で、指導者を政権側にとりこんで民族団体を翼賛化すると同時に、非ロシア人エリートに公職のポストや利権を与え懐柔したことに注目する。この抑圧と懐柔という「アメとムチ」は民族に基づくものに限らず、あらゆる政治的な異議申し立てを封じ込めるために使われた手法である。他方、東島（2008）は、富を独占するカザフ人支配エリートは民主的選挙によって非カザフ人と反対派カザ

フ人に敗北することを恐れているとして、権威主義体制の強化は民族問題への処方箋であったと主張する。

カザフスタンにおいては「民族化」そのものにも限界があった。言語面では、カザフ人（とくにエリート層）自身のなかにロシア語話者が多いため、カザフ語使用の強制によりそれを不得意とするカザフ人を疎外することは回避され、カザフ語の国家語化はシンボリックなレベルに留まった（Dave 2007）。また Schatz（2000, 2004）によれば、資金不足によりカザフ化キャンペーンの大部分が紙の上で終わった一方で、国家によるカザフ民族性の復興は、結果としてサブ・エスニックな氏族アイデンティティの強化につながった。

なお「カザフ化」の文脈でしばしば言及されるものに、カザフスタン以外の諸外国に居住するカザフ人を対象とした移住奨励政策がある。Cummings（1998）が述べているように、独立後の政権は在外カザフ人の呼び寄せにより、ロシア帝国・ソ連時代に激減（飢餓などによる死亡および国外脱出）したカザフ人人口を増大させ、植民地的な過去の遺産と決別することを目指した。しかし近年、ロシア人やドイツ人などの大規模な流出によりカザフ人の人口的優位が確立された一方、カザフスタンの経済発展を背景にカザフ人移民が増加したため、彼らの移住の政治的意義は薄れつつある（岡 2010）。なおカザフ人移民についての本格的研究に、カザフスタンおよびモンゴルでのフィールドワークに基づく Diener（2009）がある⁵。

第2節 政治体制

カザフstanは、大統領に強大な権限を与えた 1995 年憲法が議会不在の時期に国民投票によって採択されて以降、一貫して権威主義的傾向を強めてきている。現職大統領のヌルスルタン・ナザルバエフ（Nursultan Nazarbaev）は、ソ連崩壊直前の 1991 年 12 月に初代大統領に選出されたのち、再選と任期延長を繰り返して権力を掌握し続け、来月（2011 年 4 月）に実施される選挙でも勝利が確実視されている。また議会においても反対派の排除が進み、2007 年以降は大統領を党首とするヌル・オタン党が議席を独占している。

カザフスタンの権威主義体制はなぜ、またいかにして成立し強化されたのか。日本では宇山（1996, 1999）がこの問題に比較的早い時期から注目してきた。中央アジア諸国の政治体制を論じた論文で宇山（2004）は、大統領が強い権限を持つこれらの国々の権威主義体制を、共産党が国家と一体化したソ連時代の「党＝国家型権威主義体制」との比較で「大統領権威主義」と呼ぶ。宇山は、1990 年代の移行期に、大統領はエリートの統合と利益調整というかつて共産党が果たしていた機能を代替しつつ、自らへの忠誠という原則に基づいてエリートを再編したと指摘する。

カザフスタンなど旧ソ連諸国の権威主義体制に関する関心を一気に高めたのは、2003～05年のいわゆる「カラー革命」（グルジア、ウクライナ、クルグズスタン<キルギス共和国>で市民の抗議行動を背景としておこった政権交代）である。これに続いて旧ソ連の権威主義体制が次々と倒される「民主化ドミノ」に期待する見方もあったが、「革命」は結局、他の国々には波及しなかった。そのためポスト・ソビエト空間において、ある政権が崩壊する一方で別の政権が安定しているのはなぜなのか、という問いがさかんに議論されるようになり、ナザルバエフ政権の強さはしばしば隣国クルグズスタンのアカエフ政権との比較で論じられた⁶。

ナザルバエフ政権が権力の維持に成功している理由の一つとしては、選挙における強さが指摘されている。これは単に国民の（消極的なものも含め）支持を得ているだけではなく、選挙操作とイメージ戦略に長けていることを指している⁷。大統領をはじめとする支配エリートは、反対派に政権を任せるのは危険であり、社会の安定と経済発展を実現できるのは自分たちしかないと思わせることに成功しているのである⁸。Schatz

（2009）は、「チューリップ革命」（2005年3月）の端緒となった2005年クルグズスタン議会選挙と、ナザルバエフが圧勝したカザフスタン大統領選挙（2005年12月）とを比較し、とくに「ディスコースの先買（discursive preemption）」（先手を打って世論を操作し反対派の動きを封じ込めること）において、ナザルバエフ政権がアカエフ政権よりもはるかに優れていたと指摘している。また Isaacs（2010）も、反対派が動員を行いにくくするよう政治空間が巧妙に管理されていることに加え、経済成長により物質的利益を享受する一般市民はナザルバエフの手腕を評価する一方、政治には無関心であるため、「革命」は起こりにくいとみる。

第二に、政権エリートの団結の強さが挙げられる。「カラー革命」が起こった国々では体制派エリートにまとまりがなく、反対派が不利な状況下でも政治生命を維持したのに対し、カザフスタンの体制派エリートの結束は堅く、反対派は弾圧や懐柔によって弱体化されている（宇山・前田・藤森 2006）。これに対し Hale（2005, 2006）は、旧ソ連諸国の「パトロン的大統領制」（patronal presidentialism）（大統領が公式な権力だけでなく、パトロン・クライアント関係に基づく非公式かつ強大な影響力を持つ）の下では、大統領が権力を掌握している限り体制への挑戦は起こりにくいが、任期切れが近づいたり、病気や支持低下などにより再選困難との見方が強まるとエリートが離反し、政権交代が起きると主張する⁹。

なおカザフスタンの政治エリートに関する実証的研究（Cummings 2005）によれば、ナザルバエフ政権はパトロン・クライアント関係に基づく登用と能力主義とを戦略的に使い分けてきたが、2001年頃までにはテクノクラートのコントロールが困難になってきたため、大統領への忠誠により重きを置くようになり、政治システム全体の大統領個人への依存度が強まった。またカミングスは、公職の提供による懐柔ときわめて頻繁な人事異動に加えて、政治エリートと特定の地方との結びつきを弱めるため、中央・地方

を行き来させる人事（州知事は大統領の任命制である）が行われているとして、中央による地方エリートの掌握という側面を強調している。これに対し、地方エリートの自律性を指摘する研究もある。Jones Luong（2002）および Schatz（2004）によれば、州知事の在任期間は短く入れ替わりも激しいが、大統領によって任命されるのは当該地域の出身者で、かつ（あるいは）そこでキャリアを積んだ人物であることが多い。

まとめ

以上見てきたように、カザフスタン政治研究においては民族問題が中心的位置を占めていたが、近年は政治体制や政治エリートに注目する研究が増加している。むしろ、エスニシティの重要性が失われたわけではないが、民族問題も権威主義体制下における政治的異議申し立ての封じ込めという文脈で論じられるようになってきている。このような変化は、カザフスタンにおけるロシア人の政治的プレゼンスの低下、ナザルバエフ政権の長期化と権威主義化、および旧ソ連諸国における「カラー革命」の勃発などの政治・社会の動きを反映したものといえよう。

注

¹ 例外として Laruelle and Payrouse（2007）。このモノグラフはロシア語だが、原著は2004年にフランス語で出版された。

² 在外ロシア人に関する研究は数が多いが、代表的なものに Kolsto（1995）、Melvin（1995, 1998）、Laitin（1998）、Chinn and Kaiser（1996）などがある。

³ 全人口に占めるロシア人の割合は1989年には37.8%であったが（ソ連国勢調査）、1999年には29.9%、2009年には23.7%に減少した（いずれもカザフスタン国勢調査）。

⁴ 宇山（1999）によれば、このころを境に民族団体の活動だけでなく、民族問題をめぐる論争も急に沈静化した。

⁵ モンゴルはカザフスタン独立後の数年間にわたりカザフ人移民の最大の送り出し国であった。ただし近年はウズベキスタンからの移民が増大している。

⁶ 比較政治学における権威主義体制の持続性に関する仮説と、旧ソ連諸国にその仮説を適用する上での問題点については、東島（2009）参照。

⁷ 選挙前の利益分配に注目する研究もある。東島（2009）は、ナザルバエフ政権はエリートと市民に対する分配を平等に行ってきたため体制維持に成功しているが、2000年以降のアカエフ政権下ではエリート間の利益分配に偏りがあったため、選挙不正を契機に抗議行動が発生し、体制崩壊に至ったとみる。

⁸ Matveeva（2009）は、中央アジア諸国の政権がこのような宣伝によって自らの統治を正統化してきたことを論じている。

⁹ ただしこの説は、少なくともクルグズスタンの「第二次革命」には当てはまらない。クルグズスタンでは、2005年の「チューリップ革命」後、大統領に就任したクルマンベク・バキエフ（Kurmanbek Bakiev）が2010年4月に政権を追われたが、このとき起こった大衆の抗議行動は選挙とは無関係であった（宇山2010）。

文献リスト

<日本語文献>

- 宇山智彦 1996. 「カザフスタンの権威主義体制」 『ロシア研究』 23: 91-109.
- 1999. 「カザフスタン政治の特質について」 木村喜博編『現代中央アジアの社会変容』 東北大学学際科学研究センター 69-92.
- 2004. 「政治制度と政治体制：大統領制と権威主義」 岩崎一郎・宇山智彦・小松久男編『現代中央アジア論：変貌する政治・経済の深層』 日本評論社 53-79.
- 2010. 「クルグズスタンの（キルギス）の再チャレンジ革命：民主化・暴力・外圧」
[<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/center/essay/20100420.pdf>].
- 宇山智彦・前田弘毅・藤森信吉 2006. 「グルジア・ウクライナ・クルグズスタン三国『革命』の比較」 藤森信吉・前田弘毅・宇山智彦『「民主化革命」とは何だったのか：グルジア、ウクライナ、クルグズスタン』（21世紀COEプログラム研究報告集 No.16）北海道大学スラブ研究センター 79-85
[<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/coe21/publish/no16/04three.pdf>].
- 岡奈津子 2006. 「カザフスタン：権威主義体制における民族的亀裂の統制」 間寧編『西・中央アジアにおける亀裂構造と政治体制』（研究叢書 No.555）日本貿易振興機構アジア経済研究所 211-248.
- 2010. 「同胞の『帰還』：カザフスタンにおける在外カザフ人呼び寄せ政策」 『アジア経済』 第51巻第6号 2-23.
- 東島雅昌 2008. 「カザフスタンにおける権威主義化と安定化の論理：経済自由化のもとでの『民族的』競争寡頭制？」 伊東孝之編『せめぎあう構造と制度：体制変動の諸相』 正文社 241-282.
- 2009. 「選挙不正と権威主義の命運：比較の視座のなかのカザフスタンとキルギス」 早稲田大学 GCOE-GLOPEII Working Paper Series No.17
[<http://globalcoe-glope2.jp/modules/mydownloads/>].

<外国語文献>

- Bohr, Annette 1998. “The Central Asian States as Nationalising Regimes.” In *Nation-Building in the Post-Soviet Borderlands: The Politics of National Identities*. ed. Graham Smith, 139-164. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bremmer, Ian 1994. “Nazarbaev and the North: State-Building and Ethnic Relations in Kazakhstan.” *Ethnic and Racial Studies* 17(4): 619-635.
- Brubaker, Rogers 1996. *Nationalism Reframed: Nationhood and the National Question in the*

- New Europe*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Chinn, Jeff and Robert Kaiser 1996. *Russians as the New Minority: Ethnicity and Nationalism in the Soviet Successor States*. Boulder: Westview Press.
- Cummings, Sally 1998. "The Kazakhs: Demographics, Diasporas, and 'Return'." In *Nations Abroad: Diaspora Politics and International Relations in the Former Soviet Union*. eds. Charles King and Neil J. Melvin, 133-152. Boulder: Westview Press.
- 2005. *Kazakhstan: Power and the Elite*. London: I.B. Tauris.
- Dave, Bhavna 2007. *Kazakhstan: Ethnicity, Language and Power*. London: Routledge.
- Dave, Bhavna ed. 2010a. *Politics of Modern Central Asia (Critical Issues in Modern Politics)*. Volume I. *Encounters with Modernity: Russian and Soviet Rule*. London and New York: Routledge.
- 2010b. *Politics of Modern Central Asia (Critical Issues in Modern Politics)*. Volume II. *State-Society Relations: Stability and Transformation*. London and New York: Routledge.
- 2010c. *Politics of Modern Central Asia (Critical Issues in Modern Politics)*. Volume III. *Institutions, Informal Politics and the Challenges of Promoting Civil Society and Democracy*. London and New York: Routledge.
- 2010d. *Politics of Modern Central Asia (Critical Issues in Modern Politics)*. Volume IV. *The Changing Geopolitical Context*. London and New York: Routledge.
- Diener, Alexander C. 2009. *One Homeland or Two?: The Nationalization and Transnationalization of Mongolia's Kazakhs*. Stanford: Stanford University Press.
- Hale, Henry E. 2005. "Regime Cycles: Democracy, Autocracy, and Revolution in Post-Soviet Eurasia." *World Politics* 58: 133-165.
- 2006. "Democracy or Autocracy on the March? The Colored Revolutions as Normal Dynamics of Patronal Presidentialism." *Communist and Post-Communist Studies* 39: 305-329.
- Isaacs, Rico 2010. "Kazakhstan." In *The Colour Revolutions in the Former Soviet Republics: Successes and Failures*. eds. Beacháin, Donnacha Ó and Abel Polese, 196- 216. London: Routledge.
- Jones Luong, Pauline 2002. *Institutional Change and Political Continuity in Post-Soviet Central Asia: Power, Perceptions, and Pacts*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kolstoe, Paul 1995. *Russians in the Former Soviet Republics*. Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press.
- Kolstø, Pål 1998. "Anticipating Demographic Superiority: Kazakh Thinking on Integration and Nation Building." *Europe-Asia Studies* 50(1): 51-69.
- Laitin, David D. 1998. *Identity in Formation: The Russian-Speaking Populations in the Near*

- Abroad*. Ithaca, NY: Cornell University Press.
- Laruelle, Marlene and Sebastien Peyrouse 2007. “*Russkii vopros*” v nezavisimom Kazakhstane: istoriia, politika, identichnost’. Moscow: Izdatel’stvo “Natalis”.
- Masanov, Nurbulat, Erlan Karin, Andrei Chebotarev, and Natsuko Oka 2002. *The Nationalities Question in Post-Soviet Kazakhstan*. Chiba, Japan: Institute of Developing Economies, JETRO [<http://www.ide.go.jp/English/Publish/Download/Mes/51.html>].
- Matveeva, Anna 2009. “Legitimising Central Asian Authoritarianism: Political Manipulation and Symbolic Power.” *Europe-Asia Studies* 61(7): 1095-1121.
- Melvin, Neil J. 1995. *Russians Beyond Russia: The Politics of National Identity*. London: Pinter.
- 1998. “The Russians: Diaspora and the End of Empire.” In *Nations Abroad: Diaspora Politics and International Relations in the Former Soviet Union*. eds. Charles King and Neil J. Melvin, 25-57. Boulder: Westview Press.
- Schatz, Edward A. D. 2000. “The Politics of Multiple Identities: Lineage and Ethnicity in Kazakhstan.” *Europe-Asia Studies* 52(3): 489-506.
- 2004. *Modern Clan Politics: The Power of “Blood” in Kazakhstan and Beyond*. Seattle: University of Washington Press.
- 2009. “The Soft Authoritarian Tool Kit: Agenda-Setting Power in Kazakhstan and Kyrgyzstan.” *Comparative Politics* 41(2): 203-222.

